

鶴牧版『史記評林』に想ふ

——『明治天皇の御修学』補遺——

近 藤 啓 吾

私が『史記評林』の諸版のうちに鶴牧版といふがあることを初めて知つたのは、大東文化学院本科の学生であつた時、川又武先生の講義のうちに『史記』に触れて、『史記』には訓点を施した和刻の『評林』本があつて読むのに便利であるが、それには八尾版・紅屋版等、種々の版があり、そのうちで鶴牧版といふが有つてこれが一番よいとうかがつたことによる。そしてその講説に『史記』に憧れた私は、神田・本郷とそれを探して歩いたが、若冠の書生に過ぎなかつた私が鶴牧版『史記』を求め得る筈はなく、漸く手に入れることができたのは、柱に「天明丙午再刊」とある大判二十五冊のそれであつて、その二十五冊を、朱筆を手にながら、その後刷りのために処々字の崩れてゐるのに苦しみつつ何とか通読し終

へたのは、復員して大東文化学院高等科に復学した時であり、敗戦の失意の身に『史記』の記述は感慨一入深きものであつた。

私が漸く鶴牧版『史記評林』を手にすることができたのは、昭和も三十年を過ぎ、平泉澄先生よりそれを見せて頂いた時である。その版式の精微なる、造本の気品高き、まことに川又先生がいはれた通りであつたが、しかもその書物が、明治二年といふ天下騒然たる際に、鶴牧藩といふ一万五千石の小藩によつて刊行されたことを語られた平泉先生の御話しに、その感動は更に深いものとなつた。

平泉先生は昭和二十年四月、戦災にその蔵書の殆どを失はれた際、それまで愛読された『史記』をも失はれた

ので、やがてこの書を求められて、大学の研究室に於いて静かに繙いてをられたといふ。そして終戦とともに大学を辞して故郷平泉寺に帰られた先生は、その読後の感慨を「史記夜話」の一篇に纏められる。その擲筆は昭和二十二年七月とのことであるが、その「夜話」の最初に記してをられるのが、この鶴牧版『史記評林』のことである。この條をそのまま、次に転録させて頂くことにする。

「私は支那の歴史を専攻した者では無いが、『左伝』を愛読し、『史記』を愛読して措かず、座右にこれが無い時には、心寂寥を感じる程であつた。それ故、昭和二十年の四月十三日、戦災にかゝり、蔵書の大抵烏有に帰した時、『史記』も亦焼失したので、寂しさに堪へず、危難と混乱とのうちにありながら、わづか十日後に『史記』と『漢書』とを買求めたのであつた。その新に求めた『史記』は、明治二年翻刻の鶴牧版増訂史記評林五十冊、しかも幸にその特製上本であつた。私は頻りに鳴る空襲の警報をよそに、殆んど人無き大学の研究室に於いて、静かに之をひもといた。そしてこれまでうつつかりしてゐた事に、いろいろ氣がついた。

その第一は鶴牧藩が、明治二年に之を翻刻したと

いふ事である。鶴牧藩といつたところが、大抵の人には見当もつかないであらう。今の千葉縣姉崎町、即ちそれであるといふ。名前が變つてゐるので、鶴牧では一向分らないが、今の名の姉崎にしたところで、ひろく知られてゐる町ではあるまい。慶應の『武鑑』によれば、その地、江戸を距ること十八里、藩主は水野肥前守忠順、文政十年壹岐守忠韶の代に房州北條よりこゝに移り、天保十三年に忠順家督を相続して、一万五千石を領するといふ。一万五千石といへば、失礼ながら小藩である。その微々たる小藩が、しかも幕末維新の際、世情騒然たる中に、精密なる校勘を加へ、正確なる印刷を以て大本五十冊の『史記』を世に贈つたのである。容易ならざる苦心であつたに相違ない。藩主の水野肥前守忠順その人も、また命を受けて校正に当り、刊行につとめた藩士も、その功労は、大なりとしなければならぬ。本書は毎冊の奥に校正に当つた者の名を記して、責任を明らかにしてゐるが、その二人列記せる中の上席は必ず田中篤実であつて、他は本多政辰とか、小幡利貴とか、大多和堯則とか、長谷川敬直とか、林義次とかいふ人々である。しかるに秋月種樹の序文を見ると、藩士の代表として、田中篤実、豊田一貫

の両名を挙げてゐる。或は田中氏校正の事を主宰し豊田氏刊行の務を担当したものであらうか。小藩であつた為に、その学校修業館の名も一向世に知られてゐないが、騒然たる世の変転期に於いて、敢へて本書の刊行を遂行した事は、偉なりとしなければならぬ。

次に私の驚いたのは、秋月種樹の序文である。それは明治二年の六月に書かれたものであつて、種樹は時に副知学兼侍読であつた。序文によれば、彼は忝くも侍読の員に備はつたので、右大臣三條実美と相談をして、『史記』を御進講申上げることにしたが、善本のないのを遺憾として、やむを得ず新に印刷しようとしてゐたところ、たまたま此の鶴牧版が出来て、藩主水野氏より献上した。之を見るに字画の楷正、校勘の精到、世間流布の本にくらべて頗る見事であつて先づ完全といつてよい。これは維新文明の皇治に貢献するところ多大であらうと、かういふものである。この序文によつて、私は明治天皇が明治二年に『史記』の進講をきこしめされたといふ事と、そしてそれは此の鶴牧版が用ゐられたといふ事を知つた。明治二年といへば奥羽の戦乱こそ漸く鎮定したものの、維新の大業はわづかに其の第一歩

を踏み出したばかりで、大切開を要する問題は山積してゐる。その百事草創、政務多端を極むる時に於いて、寸暇を以て『史記』を進講せしめ給ひ、しづかに古今東西の治乱興亡に思を潜め給うたといふ事は、深く之に注意しなければならぬ。而して彼の鶴牧版がこの時御用に立ち、明治の興隆に貢献したといふのであれば、藩の主従多年の苦心は、勞して憾みなしといふべきであらう。」（『寒林史筆』所収）

鶴牧版『史記評林』については、池田蘆洲翁著・男池田英雄氏校正増補の『史記研究書目解題』にその詳細なる解説があつて、頗る啓発せられることであるが、それは書誌学的記述に止まるものであつていはば表面の紹介といつてよく、同版『史記評林』のところに踏込んでの記述とはいへない。初めて同版のところに踏込んでこれを説かれたのは、平泉先生の右の文を嚆矢とするといはねばならない。先生の右の文は、『史記夜話』の最初の一節であつて、「史記夜話」は右の鶴牧版『史記評林』のことのみでなく、『史記』そのものについてその全般の構成に対する考察を下してその特色を明らかにしてをられ、即ち司馬遷が一見不当と思はれる彼の項羽を本紀に加へ、孔子を世家に列してゐる理由を考へて、その権勢に阿らず非運に屈せざりし高志を明らかにし、更に古

来士を退けて姦雄を進めたと非難されて来た游侠列伝や、道徳を軽んじ財利を重んじたと非難されてゐる貨殖列伝を立てた著者の心情を分析して著者のために深い同情を示され、その上にて遷の『史記』述作に込められた真意が、道義に最高の価値を置くものであり、狭い学問に拘はれて小さな尺度で人を計りながら、みづからは何の為すところもなきいはゆる道学者を固陋とし卑怯として退け、真実の高徳高節に對しひかに景慕し傾倒してゐたかを明らかにされてをり、そこには昭和二十年八月十五日終戦の日を境にして、昨日に変わる今日の世の中、正邪真偽の評價が忽ちに転倒し、占領軍にたゞ叩頭、そのいふところのままに過去の我國をすべて誤りであつたと罵倒して已まなかつた当時の世相に對する、先生の無限の思ひが投影してゐるを見ることである。その意味に於いて『史記夜話』は、『史記』とその著者に對する独自未曾有の評論といふべきものであるが、その詳細については、これ以上述べることを止めよう。

以上の拙文、実は前稿「明治天皇の御修学」に於いて、紙数の制限の爲め省略せざるを得なかつたので、それをここに補遺として追記したものであるが、当時、私は鶴牧版を述べながら老残の躬、その刊行地姉崎をたづね得ざることの責任を深く感じてゐたが、幸ひ友人了徳大学

教授細谷恵志氏が、私に代つてその責任を果たしてくれただので、以下その調査の概要を記しておくことにしよう。

「鶴牧は千葉市と木更津とのほゞ中間、内房線にて千葉駅よりは十分ほどの地であり、昔は姉崎と称し、今またそれに復してゐるが、鶴牧といつたのは、この地を領した水野氏の江戸藩邸が鶴巻町にあつたことに因むといふ。

姉崎には初め松平忠昌（越前家秀康の次男）が封ぜられ一万石を領してゐたが、その弟第二代直政が越前大野に移つたので、その後久しく廃藩となつてゐた。しかるに文政十年、若年寄として功勞があつた水野忠韶が安房北條より移り来り、これを鶴牧藩初代とし、二代忠実を経て三代忠順に至つたが、忠順深く学を好み、藩校修来館々長田中篤実、副館長豊田一貫に『史記評林』は善本なき爲めその改修を命じ、それより三十年、儒者二十名を右の二人に配し、藩の総力を挙げてその業に従ひ、明治二年に至り、ついにこれを完成、『増訂史記評林』と題してその刊行を遂げたことであつた。」

参考 新刊史記評林の序

新刊史記評林は、鶴牧藩主水野忠順の、田中篤実・豊田一貫等に命じ、校正刊刻せしめしものなり。

蓋し字畫の楷正、校勘の精到、これを従前の坊刊の諸本に較ぶれば、太だ完善なり矣。余、剪劣を以て恭くも員に今皇帝の侍読に備はり、嚮に三條右府と謀り、史記を進読したてまつらんとし、世に善本無きを以て憾みと為し、別に一本を刊して以て御前に具せんと欲せしに、適々忠順官准を蒙り、この本の刊始めて成りて、将に一本を献呈せんとし、序を余に乞ふ。余、大いに維新文明の皇治に資することを善し、為めに教言を題せり。

明治二年己巳の歳六月

副知学兼侍読秋月種樹撰す

(註) 坊刊―民間で出版した書物。剪劣―才知が浅くして人に劣る。官准―政府の許し。副知学事―秋月種樹は当時、大学大監、即ち大学別当松平慶永の次官であつた。

(元金沢工業大学教授)